

第 25 回目 御霊の一致を熱心に保つ

はじめに

●今回は、4 章 3 節に記されている「御霊の一致を熱心に保ちなさい」というパウロの「勧め」のことばを分解しながら、このことばが意味するメッセージが何かを正しく理解し、受け止めたいと考えています。ちなみに、前回は「召しにふさわしく歩みなさい」というタイトルで、「召しにふさわしく歩む」ということを学びました。

4:1 さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。

4:2 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、

4:3 平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。

●「ふさわしく」という言葉は、天秤を意味することばでした。従ってそこから次のような意味合いがあります。

(1) バランスを保っている 同じ重さをもつ

(2) 値する 似つかわしい 見合っている うまく合っている

今回は、その似つかわしさが「御霊の一致を熱心に保つ」ということばで言い表されています。

1. 「一致」の定義、およびパウロの「共に」「互いに」ということば

●まず、「御霊の一致を熱心に保つ」ということばの中の「一致」ということばを取り出して考えましょう。「一致」ということばの定義をしたいと思います。

定義① それは同化することではない

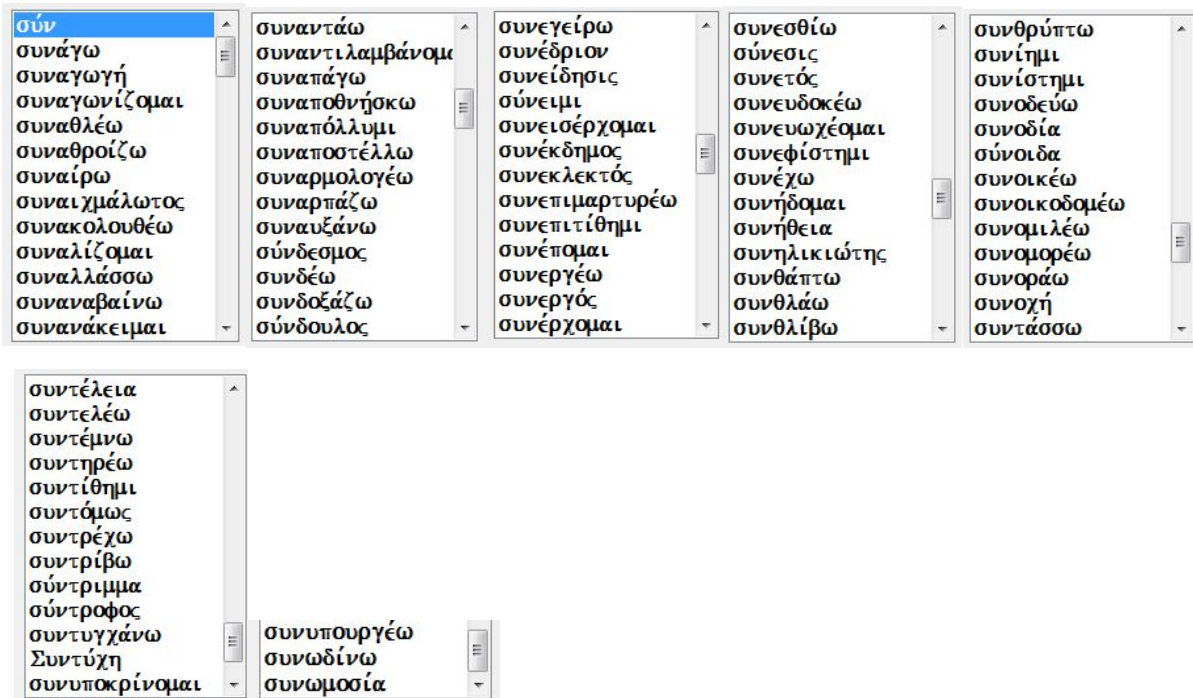
同化とは、型抜きクッキーのように、みな同じように見え、みな同じように行動することであり、それは異端と紙一重である。

定義② それは調和していること

オーケストラは各自、それぞれの楽器が好き勝手にしているように見える。しかし、実際は、ハーモニー(調和)を作り出している。

●使徒パウロの手紙における特徴のひとつは、「一致への呼びかけ」です。彼の手紙には、前置詞の「共に」(「メタ」μετά)、代名詞の「互いに」(「アッレーローン」ἀλλήλων)ということば、また、今回のテキストの中にある 3 節の「きずな」と訳された「スンデスマス」σύνδεσμος)をはじめとして、「スン」(σύν)を接頭に持つ合成語で埋め尽くされています。使徒パウロの手紙には「スン」(σύν)だけでも 39 回使われています。そしてさらに、以下のような合成語が加わります。

אגרת שאול אל האפסים



—これらは、新約聖書にある「共に」の概念を含む語彙で、他にも、接頭語の「スン」(σύν)が、他の語彙と合成するときに「σύγ-」と変化する語彙も含まれます。

●使徒パウロが独自に造った語彙もこの中にあります。たとえば、エペソ書に限って言えば、2章22節の建設用語「ともに建てる」(「スノイコドメオー」συνοικοδομέω)。また、2章6節のキリストと一体化させる語彙「とによみがえらせる」(「スネゲイロー」συνεγείρω)などがそうです。

●前置詞の「共に」(「メタ」μετά)は新約聖書で469回使われています。そのうちエペソ書では7回です(4:2, 2, 25, 6:5, 7, 23, 24)。

●「互いに」を意味する「アッレーローン」(ἀλλήλων)は新約聖書で100回使われています。そのうちエペソ書では4回です(4:2, 25, 32, 5:21)。

●パウロが「共に」や「互いに」といった語彙を多用するのは、第一に、私たちが「共に」生きると神が願っておられることを知ったからです。この「私たち」には、主にあるユダヤ人も異邦人も含まれます。

共に集う、共に住む、共に歌う、共に喜ぶ、共に悲しむ、共に苦しむ、共に助け合う、
共に語る、共に交わる、共に歩む、共に進む、共に働く、共に祈る、共に戦う、
共に結び合わされる、共に組み立てられる、共に建て上げられる、共に成長する、共に相続する。

第二に、私たちが「互いに」愛し合って生きることを神が願っておられることを知ったからです。

אגרת שאול אל האפסים

互いにさばき合わず、互いに憎み合わず、互いに思いを一つにし、互いに受け入れ合い、
互いにいたわり合う、互いに親切にする、互いに挨拶をかわす、互いに仕え合う、
互いに忍耐する、互いに赦しあう、互いに愛しあう、互いに教える、互いに戒める、
互いに慰め合う、互いに徳を高め合う、互いに重荷を負い合う。

●旧約にも神のヴィジョンである「一致の祝福」を描いた詩篇 133 篇があります。

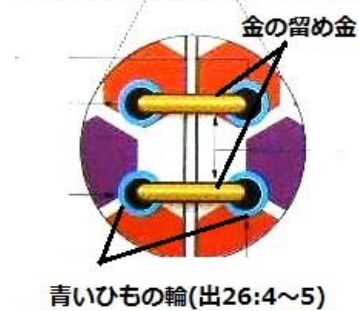
【新改訳改訂第3版】詩篇 133 篇 1~3 節 都上りの歌。ダビデによる

- 1 見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、
なんといいあわせ、なんといい楽しさであろう。
 - 2 それは頭の上にそそがれたとうい油のようだ。
それはひげに、アロンのひげに流れてその衣のえりにまで流れしたたる。
 - 3 それはまたシオンの山々におりるヘルモンの露にも似ている。
- 【主】がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。



2. 「御霊の一致」の「の」が意味すること

- (1) 人が作り出せる一致ではないこと
- (2) 人の努力や頑張りによって作ることでできない一致
- (3) 聖霊なる神が作り出す一致
- (4) 御子イエスが(十字架刑の前の晩に)祈られた祈りである
- (5) 神の最大の夢である一致



—幕屋の内側の幕に見る「50 個の金の留め金と青いひもの輪—

●オーケストラにはなぜ指揮者が必要なのでしょう。指揮者の存在の意味はなんなのでしょう。それはハーモニーを作り出すためです。自分のポジションにいるだけでは、同じ楽器や近くに座っている他の楽器の音はよく聞こえるかもしれませんが、全体がどのように調和しているのか分かりません。それを一番聞こえる位置にいるのが指揮者です。指揮者は全体の音のバランスや調和に気を配りながら、練習して造っていくわけですが、そのときすでに指揮者の頭の中にはその調和した響きができていくわけですが、その調和を乱す者がいるならば、曲を止めて注意することでしょう。単に棒を振っているわけではないのです。自分の意図する響きがどのようなものがあらかじめ出来ているのです。それにそって指揮者は全体が調和するようにしていくわけですが。

●使徒パウロが記した「御霊の一致」ということばの「の」とは、オーケストラの指揮者のように「御霊なる神が」造り出していくハーモニーなのです。多くの楽器があり、それを奏する人々がいて、みな異なる音の高さや音の強さは、パッセージ(楽句)を演奏しながら全体をまとめていく指揮者のように、御霊は私たちの中に一致を、つまり、ハーモニーができるようにはからってくださいなのです。これは人間にはできないことなのです。オーケストラの各楽器が指揮者を無視して、それぞれ自分勝手に自己主張したらどうでしょう。ハーモニーを保つことはできにくくなります。作曲家はすでに楽譜の中に、ハーモニーが奏されるように一つひとつの楽器に演奏の指定を書き込んでいます。その楽器はこのフレーズを次のように演奏しなさいと事細かく指定しています。それぞ

れの楽器を作曲家が意図したように引き出すのが指揮者の務めです。ある曲の作曲者は父なる神であり、それを他の人がだれでも演奏できるような形にした楽譜は子なる神とたとえることができます。しかし父なる神が作曲し、子なる神がそれを演奏できるように楽譜にしたところで、それで音楽が鳴るわけではありません。音楽として演奏され、人々に聞かれるためには、楽器を演奏する私たちと私たちをまとめて調和される指揮者、すなわち聖霊なる神が必要です。

3. 御霊の一致を「保つ」という意味

- 一致を「保つ」とは・・・

(1) すでに神の側では実現されています

●しかし、それが人間の罪によっていつでも妨げられるという現実が前提となっています・・・作曲家によって書かれた作品のように、すでに神の一致の計画(ヴィジョン)はすでにキリストにあって実現されている。ただ、それが美しいハーモニーをもって演奏されることを待っているのです。ところが、各演奏者が指揮者の存在を無視して、自分勝手に演奏しようとするために、ハーモニーに満ちた演奏にならないという現実があるのです。

●教会の指揮者は聖霊(御霊)です。この方は紳士な方で、きびしい口調で注意したりしない方です。演奏者一人ひとりの気づきを、忍耐をもって待っておられる方です。演奏者の一人ひとりが指揮者に従って演奏しなければ、すばらしいハーモニーをもって演奏できないことに気づくまで、じっと待たれる方なのです。

(2) 私たちの心を聖霊なる神のご支配にゆだねることが大切です

●自分勝手にこうすればいいものができると思えないことです。神の造り出すハーモニーは完璧ですが、人間の作り出そうとするハーモニーはどこか不調和です。無理があります。

●ある人がブルドックとスカンクとの戦いの話をしました。ブルドックとスカンクが戦ったとしましょう。それはいつもスカンクが勝つに決まっています。ところが、その勝利には強烈な悪臭が伴います。その臭さのゆえにだれも近寄れません。このたとえは実は主にある兄弟姉妹との間における争いをたとえたものです。たとえ、その争いにあなたが勝つことができたとしても、悪臭から免れることはできないということです。使徒パウロのキリストに出会う前の彼の生き方はそういう生き方です。自分が正しいと思うことをしないではいられないタイプでした。そしてそのために多くのクリスチャンたちを苦しめました。そしてそれは同時に神さえも、苦しめていることに気づきませんでした。

(3) 神の夢を自分の夢とし、その実現を強く願うこと

●つまり、一致への献身、あるいは「熱心さ」が必要です。パウロは御霊の一致を熱心に保つべきことを勧めています。「熱心に」です。この熱心さは御子イエスが御父の夢を自分の存在を通して実現させたように、私たちも神の夢を自分の夢として、その実現を強く願うことです。この決意がないところには、一致を保つことはできないと信じます。自分の身勝手な熱心さではなく、すでに神がキリストにおいて実現している一致を正しく理解して、それを保つこと、実際的に教会というからだの中でその一致を表わしていくことです。